

【第2分科会】

「小学校への滑らかな接続」に向けて ～はじめの一步～

指導助言者 小久保 圭一郎
発表者 藤木 潤子
司会者 森 安 みどり
記録者 阿部 夏美

記

1. 発表の概要

(1) 主題設定理由

5歳児から小学1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤を作るために重要な時期である。そして、この時期の幼児教育と小学校教育の接続のあり方を見直した「架け橋プログラム」がスタートしたことにより、これまで以上に幼児教育と小学校教育の接続が注目されるようになった。

しかし、本園の保育教諭には、成長の手助けをし、温かく見守ってきた子ども達が小学校ではどんな生活をしているのか、園で培った資質・能力がどのようにつながり生かされているのか、その様子を詳しく知る機会がほとんどなかった。

そこで、「令和3年度 岡山県幼稚園研究協議会」への参加を契機に、園全体で「幼児教育と小学校教育の滑らかな接続」についての研究に取り組むことにした。さっそく園長から小学校長に「接続」についての話をもち掛けたが、コロナ禍のため、具体的な話し合いを進めるまでには至らなかった。

ところが、令和4年6月、小学校長から「同じ小学校区の2園も交えて幼小接続に向けての話し合いを始めてはどうか」という提案があった。

これを契機に、4校園の校園長が集まって、「お互いの姿を知る」という視点で、「幼児教育と小学校教育の滑らかな接続」についての研修や率直な意見交換が実現し、「子ども同士の交流」「相互の保育・授業参観」「合同研修会」「接続カリキュラム」をキーワードとした、幼児教育と小学校教育の接続に向けての「はじめの一步」を踏み出すことができた。

(2) 取り組み・実践例について

〈園内での取り組み〉

1. 「園での生活や遊び」のふりかえり
2. 「アプローチカリキュラム」の作成
3. 「接続」についての園内研修
4. その他



〈長尾小学校と本園の交流・連携〉

令和元年6月、園長から小学校長に「公立の園と同程度の交流・連携の実施」について要望した。その結果、以下の内容について了解を得ることができた。

しかし、コロナ禍のため、令和元年度～4年度の間は実施できなかった。(プール使用を除く)

- 年長児のプール使用
- 年長児の給食体験
- 年長児の1年生の生活科の学習への参加

※プール使用について

令和元年度…まだ感染症の流行のない時期だったので2クラス合同で使用。

令和4年度…一度に使用する人数を限って使用。(20人程度)

〈長尾小学校区・3園での取り組み〉 ※公立幼稚園・私立保育園・私立認定こども園

第1回 長尾小学校区 3園合同研修会

内容：幼児教育と小学校教育との接続に向けた教育課程や指導方法の工夫についての研修・意見交流

第2回 長尾小学校区 3校合同研修会

内容：幼児教育と小学校教育との接続についての共通理解と具体的な取り組みの計画・意見交流

※今後の3園合同の取り組み予定

10月… 運動会ごっこ

11月… 秋みつけとふれあい遊び

2月… なかよし遊び

〈長尾小学校区・4校園での取り組み〉

第1回 長尾小学校区 4校園合同研修会

内容：保幼小連携の成果と課題 保幼小接続について 幼児教育と小学校教育のつながり

第2回 長尾小学校区 4校園合同研修会

内容：1年生の授業参観※3園の前年度の年長クラスの担任も参観
本年度の取り組みについて

- ・相互の参観
- ・保育、授業の公開と合同研究会
- ・接続カリキュラム作り

第3回 長尾小学校区 4校園合同研究会（仮称）

内容：こども園での保育参観 ※異年齢交流「わくわくタイム」

第4回 長尾小学校区 4校園合同研修会（仮称）

内容：幼児教育と小学校教育のなめらかな接続についての研修
グループでの意見交流

(3) 反省と考察

コロナ禍での「幼児教育と小学校教育の接続」に向けた交流や連携は実施できなかったが、「10の姿を意識した園での生活や遊びのふりかえり」、「指導計画の見直し」、「アプローチカリキュラムの作成」、「エピソード記録の実践」「園内研修」など、園だけでもできることに着手した。

小学校長からの声掛けで令和4年6月から、やっと幼小接続に向けての一步を踏み出すことができたが、まだ組織としての形ができていなかったため、本園が手を挙げて事務局を担当することにした。さっそく4校園のスケジュールを調整した。参観や研修会で先生たちが実際に顔を合わせ、本音で語り合うことで、気心の知れた仲間になれたのは何よりも大きな成果だと思う。

また、関係者が一堂に会しているため、給食体験、運動会の練習の見学、生活科の学習への参加の日程についてもすぐに調整することができた。

コロナ禍のため、はじめの一步を踏み出すまでにはかなり時間を要したが、頑張っって一步を踏み出せば、スムーズに取組を進めていくことができることを実感した。



(4) 今後の課題

今までは、園長および校長が中心になって研修等の計画を進めていたが、今後は各学校園の接続担当を決め、担当者で相談しながら、計画的に以下の課題に取り組めるようにしていきたい。引き続きキーワードは「お互いの姿を知る」です。

- ・相互の参観(授業、保育、行事など)、
- ・研修会の実施と内容の充実
- ・接続の取組の教育課程への位置づけ
- ・接続カリキュラムの作成に着手すること

2. 研究討議

(1) 発表内容に対する質疑応答

Q1. 成果と課題は、子ども目線で考えるとどのような様子か？

A1. コロナ禍で交流ができずにいた。今年度に入ってやっと実現できた活動が多いので、これから課題を見極めていきたい。

Q2. 私立だとたくさん小学校に入学すると思うが、どのくらい小学校と交流をしているのか？

A2. 毎年10校程度の小学校に分かれて就学するので、すべての小学校との交流は難しい。そのため、本園から一番近い長尾小学校との接続を通して、小学校への期待感をもつことができるようにしている。

(2) グループ討議

約80名の参加者が13グループに分かれ、以下の3点について意見交換をした。最後に各グループで話し合った内容を発表し、全体で共有した。



■幼少接続のキーワードは「お互いの姿を知る」ですが、小学校の教育や生活について知りたいことはなんですか？

【生活面】

- ・給食時間の様子
- ・トイレの使いかた
- ・休憩時間の過ごし方
- ・姿勢、言葉づかい
- ・生活の中で子どもが戸惑っていること
- ・登下校時のサポートのあり方

【学習面】

- ・入学後すぐには何を学んでいるのか
- ・園でひらがななどどこまで教えていけばいいのか

【個別の対応】

- ・個別の対応はどのようにしているのか
- ・集団についてこれない子どもへの指導の様子
- ・子どもが困っていると感じた時の先生の対応)
- ・園の時にはできていたが、小学校ではできない子どもの捉え方
- ・保護者へのトラブルの伝え方

【幼小接続にかかわること】

- ・園で身につけた力は小学校で活かされているのか
- ・園でのルール（やり方）が小学校でも通用するのか

- ・スムーズに就学を迎えるために必要なこと
- ・小学校では子どもをどのように育てたいと思っているのか

■資料の写真を見て、どんな「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が発揮されているかを書き出してみよう。



- ・どの写真にも1つの姿だけでなく様々な姿が含まれている。
- ・写真から、いろいろな経験をすることで学びがあるということが分かる、

■あなたの園は今、次のうちどのステップですか？

- 【ステップ0】連携の予定・計画がまだ無い
- 【ステップ1】連携・接続に着手したいが、まだ検討中
- 【ステップ2】年数回の授業、行事、研究会などの交流がある。接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない
- 【ステップ3】授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている
- 【ステップ4】接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、さらによりよいものとなるよう検討している

- ・ステップ1～2の段階であるという園が多かった。

■幼小の連携・接続をさらに進めていくためには、どんな取組が必要だと思いますか？

- ・園の先生が小学校の授業を参観すること
- ・小学校の先生が園の様子を見に来てくれること。
- ・保幼小中の先生で同じ研修を受ける機会

3. 指導助言

倉敷市立短期大学教授 小久保先生から、「幼児教育の学びをどのように小学校に繋げていくか」についてのお話をいただいた。



(1) 小学校との接続がスタートした背景

1990年代に小学校での『小1プロブレム』が問題となった。小学校側からは、平成元年に幼稚園教育要領の改訂で「自発的活動としての遊び」が示されて、「個の尊重」や「自由保育」が取り入れられたこと、小学校に関する記述がないことが原因だと考えられた。それ以来、平成10年の改訂で小学校に関する記述が少し含まれるようになった。そして平成30年の改訂では『スタートカリキュラム』について言及され、幼稚園、保育所、こども園の要領や指針も統一され、小学校との接続が重要視されるようになった。

(2) 生活観（生涯発達観）について

20歳（成人）をピークと考えると、記憶力、運動能力は下がっていく。エリクソンは人生を8つの段階に分けて、それぞれの葛藤課題があり、それを乗り越えることで『生きる力』や『生きる喜び』が味わえるという。

エリクソンの分類では、3歳～6歳の【幼児期】には、自発性と罪悪感の葛藤を経験することで、何かに自ら考えて取り組むという『目的』が得られる。つまり、幼児期は【学ぶ喜びの基礎を培う時期】なのである。

そして6歳～12歳の【学童期】には、勤勉性と劣等感の葛藤を経て、自分自身の『有能感』が得られる。ここでいう勤勉性とは、「知りたい、教えてもらいたい」という感情であり、もし幼児期に小学校教育を先取りして取り組んだ場合、「知っているから飽きる」ことに繋がってしまう。だから、幼児期には小学校教育を先取りするのではなく、個を尊重し、楽しく遊び、幸福感が得られるようにすることと、非認知能力を育てることが大切である。

(3) まとめ

乳幼児期だからこそできること、それぞれの時期に意味があること、幼児教育は今できることを大切にすればいいと思う。

『接続』で大切なことは、小学校側に幼児教育に対する理解を深めてもらい、子どもたちが経験してきたことや子どもたちがもつ非認知能力を、小学校教育にどのように活かしてもらうことである。これからも、子どもたちの幸せのために各園で『接続』の取組を進めてほしい。